

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成三十年一月二十七日(土曜日) 午後二時三十分開演

演目解説 (金沢美術工芸大学非常勤講師 村戸 弥生)

狂言 成上り(なりあがり)

山芋が鰻うなぎに、蛙が甲虫かぶとむしに、燕つばめが飛魚とびうおに、嫁が姑かみに、それぞれ成り上がるように、また熊野の別当の口縄の太刀のように、主人の太刀も青竹に成り上がったとは、眠っている間に太刀を奪われた太郎冠者の言い訳です。心の直すぐにない者、すっぱの仕業です。盗まれた側から見ればいたずら者。この男の言う「仕合わせ」は、窃盗の成果が上がることです。さて泥棒を主人が後ろから羽交い締めにして、それから冠者がやおら縄をない始めます。

能 高砂(たかさし)

肥後の国阿蘇の宮の神主友成一行(ワキ・ワキツレ)が都一見の旅の途中、播磨の国高砂の浦に着き、古松の木陰で落ち葉を掻く老人夫婦(前シテ・ツレ)に出会います。夫婦は高砂・住吉の松も相生あひおい、われら夫婦も姥うばが高砂、尉じやうは住吉の者であり、また高砂とは上代の万葉集、住吉は延喜当代の古今集を意味し、和歌と聖代の栄えをたとえるものと述べて、さらに万物にすぐれた松の徳、長寿・相生のめでたさを讃えた後、自らを松の精と明かし、住吉での再会を誘って小舟で沖に去ります(中入)。友成が高砂の浦に帆を上げて、月下の海を渡り住吉へ到着しますと、海神住吉(後シテ)が現れ出、神と君、そして相生の松の睦むつまじさを言祝ことほいで舞い、松風さわやかな春の夜に神遊びの奇瑞きざいが示されます。古今集仮名序とその中世的理解を踏まえ、長寿の松を擬人化して、和歌の神住吉に聖代を賛美させる構想は、流麗・精巧な曲詞に結実し、世阿弥の脇能を代表する作となりました。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附(前シテ 尉)

尉髪をつけ、小尉の面をかける。着付に小格子厚板を着、白大口をはき、水衣を上に着、腰帯をしめる。

(後シテ 住吉明神)

黒垂に色鉢巻をし、透冠を頂き、邯鄲男の面をかける。